

# 令和7年度薬事調査結果報告書

## 1. 調査の目的

近年、医薬品の安全対策や副作用管理の重要性は、医療現場で一層高まっている。特に、医薬品リスク管理計画（以下「RMP」）は、医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律に基づき、製薬企業が策定・提供するものであり、副作用の予防や早期発見、患者への適切な情報提供を推進する上で重要な役割を果たしている。

今回、「薬事調査」事業の一環として、都内病院におけるRMP利活用状況の把握と今後の課題抽出を目的に実態調査を行い、その結果を行政施策に反映する。

## 2. 調査の対象

東京都内全病院（629施設）

## 3. 調査期間

令和8年2月4日（水曜日）から同月18日（水曜日）まで

## 4. 調査方法

東京都内全病院宛てにメールにて調査を依頼した。回答方法は自治体専用デジタル化総合プラットフォーム「LOGOフォーム」にて回答を受け付けた。

## 5. 回答状況

228施設から回答を得た。  
(回答率36.2%)

## 6. 調査項目

### 【病院規模・病院種別等について】

- (1) 病床数
- (2) 病院種別

(3) 薬剤師数（常勤換算）

(4) 院外処方率

### 【RMPの活用状況について】

- (1) RMPの認知度・理解度
- (2) RMPの入手方法
- (3) 院内でのRMP活用状況
- (4) RMP情報の共有方法
- (5) RMPに関する教育・研修
- (6) RMP活用上の課題
- (7) RMP情報の改善要望
- (8) 医薬品安全対策への活用
- (9) 現場での工夫、課題、他職種との連携事例（自由記述）

### 【患者向けRMP資材の活用状況について】

- (1) 患者向けRMP資材を配布している対象
- (2) 患者向けRMP資材を配布するタイミング
- (3) 患者向けRMP資材配布時の説明・指導内容
- (4) 患者向けRMP資材の活用にあたり、現場での課題や工夫（自由記述）

## 7. 調査結果

調査結果のとりまとめにあたっては、趣旨を損なわない範囲で修正・要約をしています。

調査結果の割合については整数で表しているため、合計が100%にならない場合があります。

### 【病院規模・病院種別等について】

#### (1) 病床数

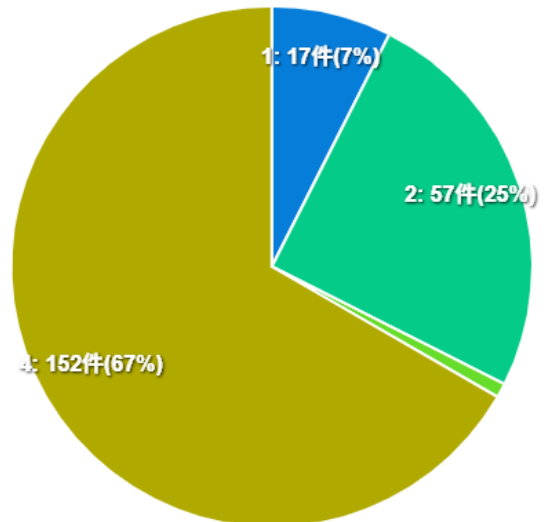
選択肢	回答数	割合
20～50床	19	8%
51～100床	41	18%
101～200床	67	29%
201～300床	35	15%
301～500床	38	17%
501床～	28	12%



- 1. 20～50床
- 2. 51～100床
- 3. 101～200床
- 4. 201～300床
- 5. 301～500床
- 6. 501床～

#### (2) 病院種別（複数回答可）

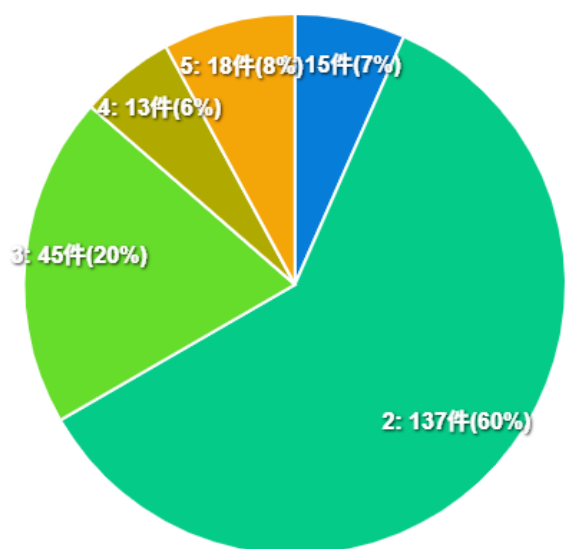
選択肢	回答数	割合
特定機能病院	17	7%
地域医療支援病院	57	25%
臨床研究中核病院	2	1%
その他	152	67%



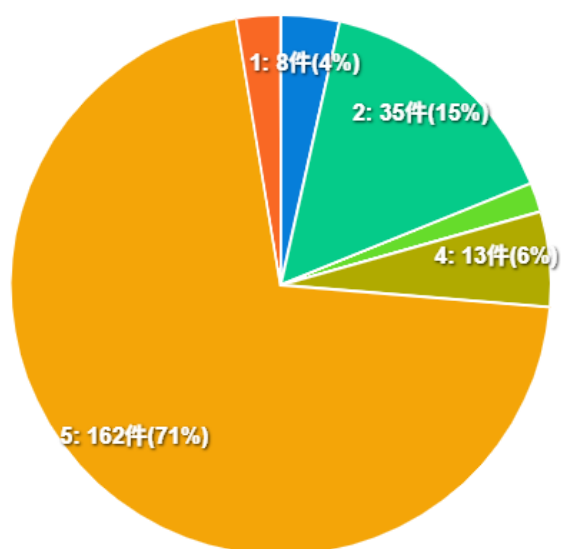
- 1. 特定機能病院
- 2. 地域医療支援病院
- 3. 臨床研究中核病院
- 4. その他

#### (3) 薬剤師数（常勤換算）

選択肢	回答数	割合
1人	15	7%
2～10人	137	60%
11～30人	45	20%
31～50人	13	6%
51人～	18	8%



- 1. 1人
- 2. 2~10人
- 3. 11~30人
- 4. 31~50人
- 5. 51人~



- 1. 0%
- 2. 0%超~20%
- 3. 20%超~50%
- 4. 50%超~80%
- 5. 80%超~100%
- 6. 不明/データなし

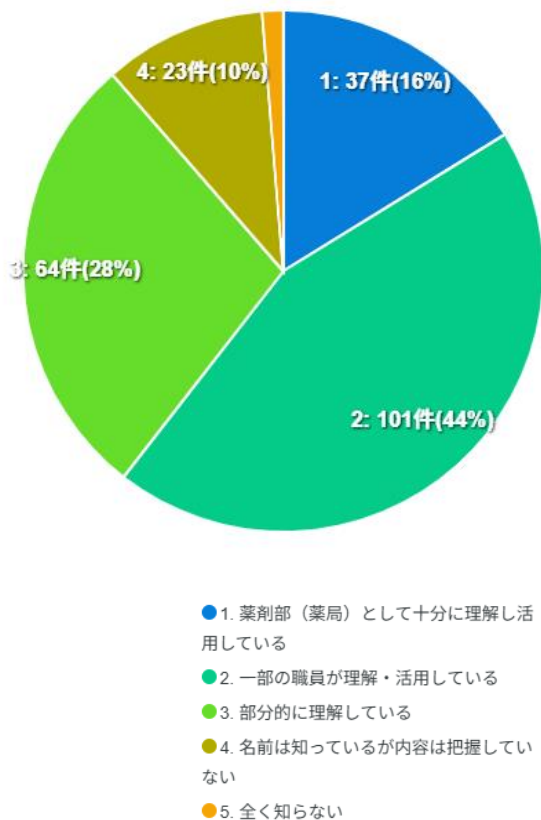
(4) 院外処方率

選択肢	回答数	割合
0%	8	4%
0%超~20%	35	15%
20%超~50%	4	2%
50%超~80%	13	6%
80%超~100%	162	71%
不明/データなし	6	3%

【RMPの活用状況について】

(1) RMPの認知度・理解度

選択肢	回答数	割合
薬剤部（薬局）として十分に理解し活用している…①	37	16%
一部の職員が理解・活用している…②	101	44%
部分的に理解している…③	64	28%
名前は知っているが内容は把握していない…④	23	10%
全く知らない…⑤	3	1%



#### 病床規模別にみたRMPの認知度・理解度

選択肢	20～50床	51～100床	101～200床	201～300床	301～500床	501床～
①	5(26)	6(15)	9(13)	4(11)	4(11)	9(32)
②	7(37)	11(27)	28(42)	18(51)	24(63)	13(46)
③	5(26)	14(34)	22(33)	11(31)	8(21)	4(14)
④	2(11)	9(22)	7(10)	2(6)	2(5)	1(4)
⑤	0(0)	1(2)	1(1)	0(0)	0(0)	1(4)

( ) 内は病床区分ごとにみた回答割合 (%)

病床数別にRMPの認知度・理解度を比較すると、病床規模が大きい病院ほど理解・活用が進んでいる傾向が認められた。特に301床以上の病院では、①「十分に理解し活用している」または②「一部の職員が理解・活用している」との回答割合が高かった。

#### (2) RMPの入手方法（複数選択可）

選択肢	回答数	割合
製薬企業（MR）からの情報提供	138	61%
PMDAウェブサイト	188	82%
学会	6	3%
医薬品卸売販売業者	35	15%
その他	5	2%
入手したことがない	18	8%

RMPの入手方法として最も多かったのが、「PMDAウェブサイト」（188件）、次いで「製薬企業（MR）からの情報提供」（138件）であった。

一方で、「入手したことがない」（18件）という回答も見られた。

《その他》

- ・DI業務支援ソフトウェア

#### (3) 院内でのRMP活用状況（複数選択可）

選択肢	回答数	割合
医薬品の新規採用時の検討資料として活用	120	53%
副作用情報の管理・共有	122	54%
患者説明・服薬指導	82	36%
院内研修・教育	48	21%
医師・看護師等他職種への情報提供	82	36%
その他	3	1%
活用していない	44	19%

RMPの活用方法としては、「副作用情報の管理・共有」（122件）や「医薬品の新規採用時の検討資料として活用」（120件）が多い結果となった。

また、「活用していない」という施設も理由とともに確認できた。

《その他》

- ・D I 担当者が情報収集ツールとして活用
- ・添付文書に記載のない有害事象発生時に、被疑薬を検討する際の情報源
- ・ヒアリングの参考資料

《活用していない理由》

- ・RMPの必要性を感じない、又は活用の目的・方法が分かりにくい。
- ・添付文書、インタビューフォーム、適正使用ガイド、学会ガイドライン等、他の医薬品情報資料と内容が重複しており、これらの資料を優先して確認している。
- ・メーカー発行のパンフレット等、他の資料の方が見慣れており、RMPを参照する機会がない。
- ・情報量が多く、内容が専門的であるため、把握に時間を要する。
- ・RMPを活用する薬剤を取り扱う機会がない。
- ・時間や人員の不足により実務上活用できない。

(4) RMP情報の共有方法 (複数回答可)

選択肢	回答数	割合
電子カルテへの添付・リンク	27	12%
院内掲示板・イントラネット	43	19%
メール配信	19	8%
定期会議・カンファレンス	70	31%
その他	21	9%
共有していない	92	40%

RMP情報については、「共有していない」(92件)が最も多い結果となった。共有方法としては「定期会議・カンファレンス」(70件)が多かった。

《その他》

- ・薬事委員会の採用検討時に共有

- ・新薬採用時の情報提供文書
- ・病棟など関係各所への配布回覧

(5) RMPに関する教育・研修 (複数回答可)

選択肢	回答数	割合
医師・看護師等他職種向けに実施している…①	26	11%
薬剤部(薬局)のみ実施している…②	65	29%
外部研修に参加している…③	12	5%
その他…④	3	1%
実施していない…⑤	144	63%

RMPに関する教育・研修については「実施していない」(144件)が最も多かった。

また、実施している場合でも「薬剤部(薬局)のみ実施している」(65件)が多かった。

《その他》

- ・学生向けに実施
- ・製品説明会への参加
- ・全職種向けに医薬品安全対策として薬剤科が講演

病床規模別にみたRMPに関する教育・研修

選択肢	20~50床	51~100床	101~200床	201~300床	301~500床	501床~
①	4(17)	8(17)	7(10)	2(5)	2(5)	3(9)
②	5(22)	10(22)	13(18)	11(30)	13(33)	13(39)
③	3(13)	1(2)	3(4)	2(5)	1(3)	2(6)
④	0(0)	1(2)	1(1)	0(0)	0(0)	1(3)
⑤	11(48)	26(57)	48(67)	22(59)	23(59)	14(42)

( ) 内は病床区分ごとにみた回答割合 (%)

病床規模別にみると、いずれの規模においてもRMPに関する教育・研修を⑤「実施していない」との回答が最も多かった。病床規模が大きい病院では、②「薬剤部(薬局)のみ実施して

いる」との回答が増加していたが、①「医師・看護師等他職種向けに実施している」との回答は病床規模によらず低い水準にとどまっていた。

#### (6) RMP活用上の課題（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
情報が多すぎて現場で使いづらい…①	104	46%
内容が専門的で分かりづらい…②	51	22%
現場への浸透・周知が不十分…③	123	54%
時間や人員の不足…④	107	47%
その他…⑤	18	8%
特に課題はない…⑥	18	8%

RMP活用上の課題については、「現場への浸透・周知が不十分」（123件）や「時間や人員の不足」（107件）といった現場視点からの課題が多く挙げられた。

また、「その他」として多様な課題が挙げられた。

《その他》

- ・企業によって内容にばらつきがある。
- ・情報が多く、かえって重要なリスク情報が把握しにくい。
- ・RMPは本来、企業が策定する管理計画書であるため、現場での活用に当たっては整理が必要である。
- ・薬剤師が実務で活用するためのツールとしては使いにくい。
- ・薬剤師以外の職種において、添付文書とRMPの違いが理解されにくい。
- ・RMP情報の管理・更新が煩雑である。

#### 病床規模別にみたRMP活用上の課題

選択肢	20~50床	51~100床	101~200床	201~300床	301~500床	501床~
①	9(28)	17(26)	32(25)	19(29)	16(22)	11(20)
②	1(3)	8(12)	13(10)	12(18)	10(14)	7(13)
③	10(31)	19(29)	36(28)	12(18)	23(31)	23(42)
④	10(31)	18(27)	36(28)	16(24)	18(24)	9(16)
⑤	0(0)	0(0)	5(4)	6(9)	3(4)	4(7)
⑥	2(6)	4(6)	6(5)	1(2)	4(5)	1(2)

( ) 内は病床区分ごとにみた回答割合 (%)

病床規模別にみると、病床規模の大きい病院では③「現場への浸透・周知が不十分」を課題として挙げる割合がやや高かった。一方、病床規模の小さい病院では、④「時間や人員の不足」が相対的に多く挙げられていた。

#### (7) RMP情報の改善要望（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
内容を現場向けに分かりやすくしてほしい	128	56%
提供方法（電子化・検索性等）を工夫してほしい	76	33%
情報量を整理・要約してほしい	131	57%
他職種との連携を意識した内容にしてほしい	107	47%
その他	12	5%
特に要望はない	29	13%

RMP情報の改善要望については、「情報量を整理・要約してほしい」（131件）や「内容を現場向けに分かりやすくしてほしい」（128件）といった意見が多かった。

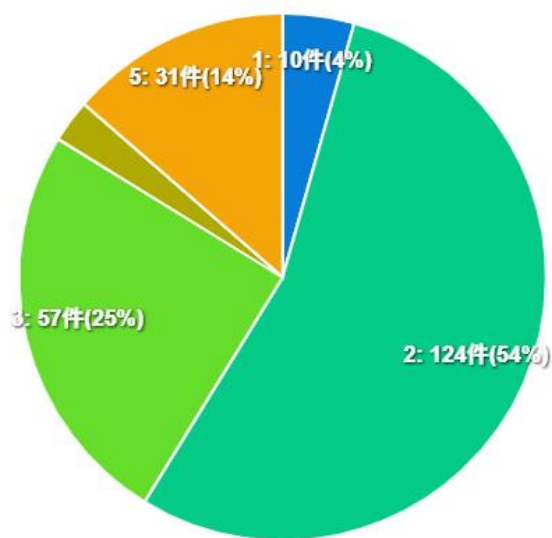
《その他》

- ・RMP情報を、添付文書等の参照頻度が高い資料からも確認できるよう、記載又はリンクを設けてほしい。

- ・現場の薬剤師が臨床でどのように活用すれば患者のリスク低減につながるかという視点を取り入れてほしい。
- ・RMP情報の更新時には、速やかに内容を反映してほしい。
- ・リスクの記載方法について、添付文書の副作用分類（例：「過敏症」「肝臓」等）のように、より分かりやすい整理を工夫してほしい。

（８）医薬品安全対策への活用

選択肢	回答数	割合
非常に役立っている	10	4%
ある程度役立っている	124	54%
あまり役立っていない	57	25%
全く役立っていない	6	3%
わからない	31	14%



- 1. 非常に役立っている
- 2. ある程度役立っている
- 3. あまり役立っていない
- 4. 全く役立っていない
- 5. わからない

医薬品安全対策への活用については「非常に役立っている」（10件）または「ある程度役立っている」（124件）という回答が58%であった。

（９）現場での工夫、課題、他職種との連携事例  
《RMPの活用方法・現場での工夫》

- ・新規医薬品採用時やヒアリング時の参考資料の一つとして活用している。
- ・重要な特定されたリスク、重要な潜在的リスクを、副作用モニタリングや被疑薬・代替薬検討の参考として用いている。
- ・新薬採用時の情報提供文書や薬事委員会資料に、RMPの重要なリスクを整理・記載している。
- ・RMPの内容を要約した資料を作成し、薬事委員会資料等に活用している。
- ・抗がん剤等について、RMPや適正使用ガイドの記載を確認し、院内作成のレジメンに反映している。

《RMPの内容・構成に関する課題》

- ・情報が多いため、現場での情報の取捨選択が困難である。
- ・簡潔に整理した要約版があるとよい。
- ・「通常の／追加のリスク最小化活動」等の用語が難解で、具体的な行動につながりにくい。
- ・6年制卒の薬剤師であっても十分に理解できていない場合があり、基礎的な説明が必要である。
- ・実務上は、インタビューフォームを優先して確認してしまう傾向がある。
- ・RMP自体が、薬剤師を含め十分に浸透していないとの認識がある。
- ・他職種から、添付文書とRMPの違いが理解されにくいとの意見がある。

《他職種との連携・情報共有事例》

- ・薬事審議会、医療安全管理委員会、医療安全推進カンファレンス等で情報共有を行っている。
- ・問い合わせや疑義照会の内容を整理し、医薬品安全対策委員会や院内研修を通じて多職種と共有している。

《今後の活用に向けた意見》

- ・ RMPを活用した具体的な事例紹介があれば、現場での活用イメージが持ちやすい。
- ・ 活用方法等の具体的な情報や資料が手軽に入手できれば、現場での活用手段が広がる。

【患者向けRMP資材の活用状況について】

(1) 患者向けRMP資材を配布している対象

選択肢	回答数	割合
新規に医薬品を処方された患者	74	32%
副作用リスクの高い医薬品を服用する患者	76	33%
医薬品の変更・追加があった患者	52	23%
その他	9	4%
配布していない	113	50%

患者向けRMP資材を配布については「配布していない」（113件）が最も多い結果となった。配布している対象としては「新規に医薬品を処方された患者」（74件）や「副作用リスクの高い医薬品を服用する患者」（76件）が挙げられた。

《その他》

- ・ 電子カルテ上の薬剤情報提供書の内容が不十分な場合に、補足資料として活用している。
- ・ RMP資材のある医薬品を服用している患者全員を対象として配布している。
- ・ 明確な配布基準は設けておらず、必要と判断した場合に配布している。

(2) 患者向けRMP資材を配布するタイミング（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
診察時（医師による説明時）	37	16%
薬剤交付時（薬剤師による服薬指導時）	93	41%
入退院時	47	21%
定期的なフォローアップ時	21	9%
その他	7	3%
配布していない	115	50%

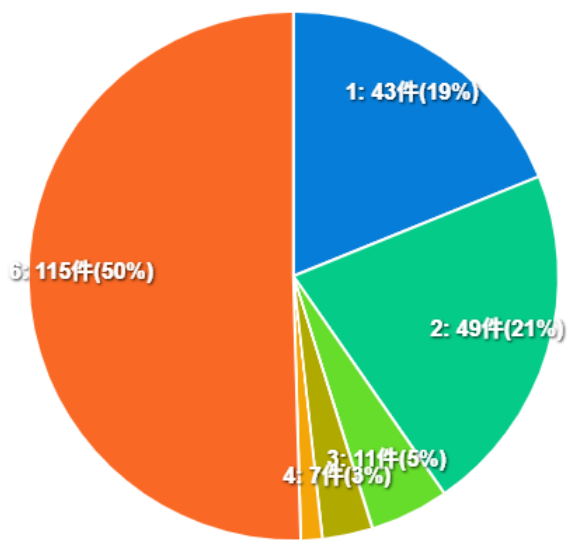
患者向けRMP資材を配布するタイミングとしては「薬剤交付時（薬剤師による服薬指導時）」（93件）が最も多かった。

《その他》

- ・ 必要時に配布している。
- ・ 新たな薬剤が採用されたときや、新規に患者へ処方されたときに配布している。
- ・ 治療開始前から、調剤時・服薬指導時、治療開始後まで、状況に応じてさまざまなタイミングで使用している。

(3) 患者向けRMP資材配布時の説明・指導内容（複数回答可）

選択肢	回答数	割合
副作用や注意事項等について患者とともに確認しながら説明している	43	19%
副作用や注意事項等について説明している	49	21%
患者からの質問に対応している	11	5%
配布のみで、特段の説明は行っていない	7	3%
その他	3	1%
配布していない	115	50%



- 1. 副作用や注意事項等について患者とともに確認しながら説明している
- 2. 副作用や注意事項等について説明している
- 3. 患者からの質問に対応している
- 4. 配布のみで、特段の説明は行っていない
- 5. その他
- 6. 配布していない

患者向けRMP資材配布時の説明・指導内容については「副作用や注意事項等について患者とともに確認しながら説明している」(43件)または「副作用や注意事項等について説明している」(49件)という回答が40%であった。

《その他》

- ・資材の内容と配布のタイミングによる

(4) 患者向けRMP資材の活用にあたり、現場での課題や工夫

《活用にあたっての課題》

- ・情報量が多く、患者や家族が内容を理解しきれない、または資材が未読となる。
- ・配布物が多くなることで、患者の理解力が低下する。
- ・文字中心の資料は高齢者にとって理解が困難である。
- ・動画資料は視聴時間が長いと負担となる。

- ・RMP以外にも患者向け資材が多数存在し、RMP資材との内容の整合性や使い分けが整理されていない。
- ・同一医薬品であっても、メーカーや先発品・後発品により記載方法が異なっている。
- ・資材の置き場所や保管方法、改訂情報の管理が負担となっている。
- ・MRが医師へ直接提供した資材については、院内での管理が十分でない。
- ・RMPに対する理解が十分でなく、院内向け資材と患者向け資材の区別が分かりにくい。

《工夫》

- ・要点を簡潔に説明し、折に触れて繰り返し説明している。
- ・医薬品への不安により服薬拒否とならないよう、内容を確認した上で配布している。
- ・高齢者に配布する資材では、簡潔な内容と大きな文字を用いている。
- ・画像、イラスト、図説等を用いた分かりやすい表現や、短時間の動画資料の活用を検討している。
- ・本人が薬を管理する患者には、資材を薬袋に入れて毎回配布している。
- ・患者配布用資材を各診察室に配置し、必要時に配布できるよう準備している。
- ・薬剤科内で資材を整理し、医師や看護師も含めて利用しやすい体制を整えている。

## 8. 考察

今回、都内病院を対象に、RMPの認知度や活用状況、課題等について実態調査を実施した。その結果、RMPは多くの医療機関において一定程度認知されており、新規医薬品採用時の検討資料や副作用情報の管理・共有等の場面で活用されていることが確認された。また、医薬品安全対策への貢献度についても、「非常に役立っている」または「ある程度役立っている」と回答した施設が過半数を占めており、RMPが医薬

品の適正使用や安全対策の一助となっている実態がうかがえる。

一方で、RMPの活用状況には施設間で差が見られ、「活用していない」と回答した施設も一定数存在した。その理由としては、「情報量が多く現場で使いづらい」「内容が専門的で分かりにくい」「時間や人員が不足している」「現場への浸透・周知が不十分」といった意見が多く、RMPを現場で活用する上での運用面の課題が障壁となっていることが明らかとなった。

RMPの入手方法としてはPMDAウェブサイトや製薬企業からの情報提供が主であり、多くの施設で情報自体は入手されているものの、院内での情報共有や教育・研修については「実施していない」との回答が多数を占めていた。このため、RMPの活用が薬剤部内にとどまっている施設も多いことが示唆された。他職種との情報共有や連携が十分に図られていない実態は、RMPが想定する多職種による医薬品安全管理の観点から、今後の課題であると考えられる。

また、患者向けRMP資材については、半数の施設で「配布していない」との回答があり、配布している場合であっても対象やタイミングにばらつきが見られた。「情報量が多く理解しづらい」「他の患者向け資材との整理ができていない」といった課題が挙げられており、患者の理解促進に向けた工夫が求められている。

これらの結果から、RMPは医薬品の安全対策において重要な役割を担う仕組みである一方、その有効性を十分に発揮するためには、現場の業務実態を踏まえた情報整理や活用方法の工夫が不可欠であることが示唆された。今後、東京都においては、本調査で明らかとなった課題を踏まえ、関係機関と連携しながら、情報提供や普及啓発のあり方について検討していく必要がある。